

<連載 8> 「よい仕事」とは？

～高齢協連合会「よい仕事」研究・交流集会に参加して～

理事長 高見 優

●中村哲さん（ペシャワール会）がアフガニスタンで襲撃され亡くなったニュース（12/4）は本当にショックでした。悲しいことです。家族や仲間そして現地の人々だけでなく、世界中から哀悼の声が上がっています。何より本人が一番無念だったに違いありません。

医師としてパキスタン・アフガニスタンに入ったものの医療より食と栄養が大事と気づき、そのため水が不可欠と井戸掘りをし、その後、緑の大地計画（灌漑計画）実現のため河川改修の土木工事に専念するというふうに、あくまでも地域の人々のニーズに応えることを最優先してきたのです。

○私たち高齢協は、高齢者（そしてすべての人）の尊厳を守るため、みんなが主役となって支え合うコミュニティづくりを目的として、各地に社会的事業・運動の組織をつくってきました。

高齢者・障がい者・若者・困窮者などさまざまな困難を抱える人のケアのため、介護保険ほか諸制度を活用した事業をしていますが、知らず知らず制度事業の経営だけが目的になっているのではないかと、思い当たるが増えてきました。

多くの制度は対象者を線引きするので、縦割りの枠から外れると利用できなくなります。たとえば、要介護高齢者の家族にひきこもりの方が居られ家族一緒にケアしたほうがよいと思ってもできないとか、若者就労支援事業に年齢制限があるとか（これは近く緩和されるかも）。

●そこで中村哲さんの仕事ぶりを思い出したいのです。医師という資格、医療という枠を越えて、必要なら井戸を掘り、土木工事にも乗り出す、その姿勢・意識・気概です。

12/6 高齢協連合会が主催した標記の「よい仕事」研究・交流集会で、新潟（ささえ愛ゆう）を含め全国13会員から、介護事業（通所3、小規模多機能3、宅老所、複合型拠点）、配食、交流スペース、本部事務局等における取組みの報告・発表がありました。

病院や他の施設から追い出された超困難ケースを自分たちがやらねばと覚悟を決めた（新潟）、管理者ほか職員が次々辞めていく事業所に入り、職員2人チームで相互に相談、トップも入り徹底して話し合い、職員ファーストで職場雰囲気改善できた、地域ケア会議で多職種の支援の輪が広がり生活環境を改善した、男性主体のグループの立上げを働きかけ地域で動き出した、市委託の高齢者在宅支援事業で他法人がやらない大量のゴミ処理を引き受け法人の信頼が高まる…等々の、利用者のニーズに寄り添って丁寧に取り組んだ「よい仕事」の報告でした。

○「制度は利用するものであって、制度に使われてはいけない」。制度・システムは手段で、目的は当事者のニーズ（要望）を受け止めて、協同して適切に解決しようとする事です。

「もしもシステムの内側に解決を見つけ出すことが不可能なんだったら、システムそのものを変えたほうがよい」（グレダさん）

●「よい仕事」とは何か？ 自分にとって、仲間にとって、利用者・家族そして地域・社会の全ての人にとっての「よい仕事」とは……

皆さん一人ひとり考えてください。そして、職員・組合員、周りの人と話し合ってみてください。

（ご感想・ご意見をお寄せください：編集部）